

期待される国際語としての英語教育の方向性

—海外在住経験者の意見に基づいて—

矢亀 尋美 教育学研究科

伊原 巧 言語教育講座

1. はじめに

世界は今や、交通手段や IT（情報技術）などの文明の発達により大変狭くなり、我が国でも政治・経済・文化活動などの多種多様な分野で世界中の人々と交流をする機会が飛躍的に増えている。英語は、その母語話者、非母語話者を問わず、さまざまな国の人々との意思伝達的手段として、その重要性がますます増加していることは言うまでもない。英語の必要性について、鈴木(1999:5)は、国内的には殆ど必要緊急性が感じられないが、国際的には世界の先進国として諸外国との交渉や交流は英語に頼らざるを得ない日本の実情を指摘している。日本の英語教科書は、従来英米志向が強く、英語を母語とする国（主として英国・米国）の文化と言語を取り扱う割合が大きかったが、最近では、国際理解あるいは異文化理解の促進も重要視されるようになり、さまざまな異文化に焦点を当てている。この傾向は、学習者の偏らない国際的な視野と知識を広げるだけでなく、世界の人々と対等に向き合っていけるコミュニケーション能力が求められていることを示しているといえる。これからの日本の英語教育の方向に関して、伊原（1996:315）は、現在の「教える言語が英語なので、扱う文化は英語圏文化を中心とするが、英語は国際語化しているので、英語圏以外の文化も扱う」から、「教える言語が英語であっても、英語は国際語化しているので、扱う文化は英語圏に偏ることなく、いずれの文化も対等に扱う」という国際英語論の立場への転換を主張している。

このように、世界の異文化理解を含めた、交流言語としての英語を意識した英語教育の期待がますます高まっており、そのための英語教育分野における工夫・改善の余地は計り知れないと思われる。筆者は、その改善点を探るために、世界の開発途上地域で国際協力の分野で活躍する青年海外協力隊や、海外勤務・留学を経験した海外在住1年以上の人を対象に「英語」に関する意識調査を実施した。彼らの国際的な経験に基づいた意見は、示唆に富み、これからの英語教育の発展のために大いに参考になるのではないかと考えたからである。この論文では、アンケート調査による回答結果の分析と考察から示唆される、我が国における国際語としての英語教育の方向性について論じていきたい。

2. 英語に関する意識調査

A. 調査目的

国際社会で生きる日本人として活躍できる英語力の育成に必要な能力を調査する目的で、海外在住経験1年以上の人を対象に、海外へ行く前後で自分の「英語」の言語能力に関して生じた意識の変化を調査する。経験1年以上の人を対象とした理由は、観光客や短期留学などの短期滞在者と比較すると、言語に対する習得意欲がより高く、カルチャー・ショック等文化適応に関わる経験をする可能性が高いからである。

B. 実施方法

2001年の8月に、国内・外の友人・知人に無記名回答の下記内容の調査協力を、直接、あるいは書簡や電子メールで依頼した。

C. 回答者経歴

1. 年齢層：全回答者 29名のうち、20代 2名、30代 21名、40代 6名である。
2. 回答者の日本で英語教育を受けた年数：6年から 13年の範囲におよんだ。そのうち、8年と回答したものが一番多く、13名であった。概して、中学・高校での6年間と大学の2年間を示していると思われる。
3. 回答者の滞在国の地域別：アジア 8カ国、アフリカ 5カ国、ヨーロッパ 4カ国、北米 3カ国、南米 2カ国、オセアニア 4カ国である。
4. 滞在年数：一カ国につき最短期間で1年、最長期間の者で 13年である。滞在年は、古い者は 1981年、新しい者は現在滞在中である。
5. 使用言語の種類：英語の他に 18言語が挙げられた（日本語を除く）。英語を回答に挙げなかった者は 8名である。
6. 滞在理由：青年海外協力隊（JOCV）が回答者の 62%（18名）を占めており、主として、滞在国の官庁等の国の機関や地方自治体等の所属での勤務である。その他 38%（11名）は留学、日本あるいは外資系企業の海外勤務、また海外勤務をする家族に同行という理由である。
7. その他：複数の海外滞在の経験のある者は 20%（6名）である。多い者で 4カ国。
8. 青年海外協力隊（JOCV）について：1995年発行の青年海外協力隊概要によれば、隊員の応募資格として自ら海外協力活動に参加しようとする自発意志と奉仕精神を有し、異文化の人々と生活を共にする協調性のある者、異文化の中で協力活動を実践するのに必要な語学的素養と適応力を有する者が挙げられている。また、派遣前訓練のカリキュラムには、コミュニケーションの手段としての語学力の強化、異文化の理解と適応等の講座が含まれている。原則として、現地では、地元の人々と共に生活し働くという関わり方をする事になっている。

D. 質問内容

1. 海外へ行く前の自覚している自分の英語力で得意な分野は何か。
2. 海外生活を始めたときに身に付けておくべきだったと感じた英語力や知識は何だったか。
3. 帰国後向上したと思う英語力は何だったか。

（質問 1～3：選択肢回答）

与えられた選択肢：a. コミュニケーション力 b. リスニング力 c. スピーキング力
 d. リーディング力 e. ライティング力 f. 文法 g. 語彙力
 h. その国の文化的な知識（上記質問 2. のみ） i. その他

4. 海外生活を始める前に受けた効果的な語学トレーニングは何だったか。
5. 日本の英語教育の目指すべき方向についての意見

（質問 4～5：自由回答）

E. 回答結果

1. 上記 D の調査内容の質問 1～3 に関する回答の割合を下の表 1. で示す。割合は各質問につ

いて回答者全体の人数に対する一つの選択肢を回答した人数である。

表 1. 質問 1～3 に関する回答の割合

質問事項 選択肢	1. 海外へ行く前 の 得意能力	2. 海外生活開始時に 必要だと感じた能力	3. 帰国後向上した 能力
a. コミュニケーション力	32%	13%	29%
b. リスニング力	3%	26%	22%
c. スピーキング力	0%	24%	20%
d. リーディング力	24%	5%	4%
e. ライティング力	3%	3%	9%
f. 文法	15%	0%	5%
g. 語彙力	0%	19%	9%
h. その国の文化的知識	-	8%	-
i. *その他	24%	2%	2%

*選択肢 i. その他の回答：質問 1 「特になし」(15%)、「不得意」(3%)「発音」(6%)。質問 2 「コ
レポン(ビジネス文書作成)」(2%)。質問 3 「物怖じしない力」(1%)「発音」(1%)。

2. 質問 4 (海外生活前の効果的な語学トレーニング) についてさまざまな回答が得られ、次の
a)～d)のように大きく 4 つに分類した。詳細を以下に示す。

- a) 映像・音声を伴う教材を使った自習型 (主にリスニング対策)
- b) 英語母語話者との会話トレーニング
- c) まとまった内容の発信トレーニング
- d) 主として語彙・文法の学習

- a) * TV やラジオで生の英語に触れる。
 - * NHK ニュース (英語) や英字新聞を一定の時間内で見た後、*サマリーを述べ、意見交
換 (*下線部は下の分類 c) と重複)
 - * 音楽テープで歌の聞き取り。
 - * 映画を見る。
 - * 英会話テープを聴き、文が完成するまで書き取りをする。
 - * テープで集中的なリスニング練習。
 - * 同じ会話を何度も聞き、実際に発音する。
 - * アルク社のヒアリングマラソン、ボキャブラリーマラソンを使用。
- b) * 合宿による缶詰トレーニング
 - * 少人数での英語のみの会話中心のレッスン
 - * 英語母語話者との旅行、外出、食事、ゲーム
 - * 毎日数時間の集中レッスン
- c) * 自分の専門分野や興味のあることについてスピーチ
 - * 自己紹介や身の回りのことの説明

- * ディスカッション
 - * 自分の話したいこと、生活上必要なことを話す機会を作る。
 - * JOCV の訓練 (英語母語話者指導による文法の誤りを気にしない発話やライティング訓練)
 - * ジャーナルを書く
 - * *NHK ニュース (英語) や英字新聞を一定の時間内で見た後、サマリーを述べ、意見交換 (*下線部は上の分類 a) と重複)
- d) *
- * 英文の専門書での新技術の勉強
 - * 英語の辞書でアラビア語の勉強
 - * TOEFL (大学院留学の基礎能力となるリスニング, 文法, リーディング, 単語) の勉強
 - * 文法の基本と生きていける会話を身につける
3. 質問5. (日本の英語教育の目指すべき方向) については、回答者から主として次の4点に関連してまとめることができた。具体的な意見は次のとおり、示唆に富んだものが得られた。
- a) 重視すべき英語力
- b) 配慮すべき英語教育環境
- c) 異文化理解
- d) 母国語教育
- a) *
- * リスニング力・スピーキング力・会話力 (10名)
 - * コミュニケーションの手段としての英語力 (誤りを恐れない力、非言語コミュニケーション力を含む) (10名)
 - * 実践的な内容を重視する。(作文力、手紙作成など) (3名)
 - * 発音訓練(3名)
 - * 文法の知識をおろそかにしない。(2名)
 - * 語彙の記憶 (1名)
 - * 英語で考える力 (1名)
- b) *
- * 楽しく学ぶ (歌・ゲーム・外国人との接触など) (5名)
 - * 学習者の意欲を引き出す (学習目的を明確にする、英語を使う楽しさや必要性を感じさせる機会 (姉妹校提携等) を与える) (4名)
 - * 英語科目の自由選択制 (各自に合ったコースの選択制、必要の無い者・関心の無い者は選択しなくて良い、英語以外の外国語の選択肢) (4名)
 - * 小学校から英語・自文化・異文化に親しむ機会与える (3名)
 - * 教師の英語力・指導力のレベルアップ (2名)
 - * ネイティブの AET 採用の増加 (1名)
 - * 実践的な力のつくカリキュラム作り(1名)
 - * 2ヶ国語教育のできる環境 (1名)
 - * 個人指導の可能な環境 (1名)

- * 英語を受験科目からはずす（2名）
 - * 語学力のある良い外国人を友人にもつ（1名）
 - * 大学の専門課程で英語の教科書を使用する（1名）
- c) * 異文化理解を促進する（3名）
- * 白人や外国人に対するコンプレックスを持たせない。（3名）
 - * 異なる発想法を使い分けられる。（低文脈・高文脈）（1名）
- d) * 日本語教育（母語を大切にせる教育を含む）の強化を合わせて行う。（4名）
- * 「自分の考えを分かりやすくまとめ、人を説得する」言語能力をつける（1名）

3. 分析と考察

1. 「海外へ行く前の自覚している自分の英語力で得意な分野」についての回答結果は、日本の学校での英語教育の実態が浮き彫りとなっている。得意な英語能力として多い順に「コミュニケーション力」、「リーディング力」、「文法」が選択された。「リーディング力」と「文法」が選択されている理由は、従来の英語教育が重点をおいてきた結果であろう。「その他」（24%）の回答には、「発音」の他、「特になし」「得意ではない」が18%を占めていたことは、英語に対し不得意意識を持っていると推察できる。リスニング力、スピーキング力が非常に低い割合であるにも関わらず、コミュニケーション力が選択されている理由を考えると、回答者は、表情や身振り等を通して相手の意思を読みとり、言葉をつなげて意思の疎通をする力としてコミュニケーション能力を捉えているものと思われる。
2. 「海外生活を始めたときに身に付けておくべきだったと感じた英語力や知識」を問う質問2の回答結果は海外で実際に必要だったと自覚されている能力を示している。リスニング力、スピーキング力、語彙力が上位を占めたが、残念ながら質問1の回答結果と比較すると、それらは、最も自信のない能力になっていることがわかる。
3. 「帰国後向上したと思う英語力」についての結果からは、現地の滞在・生活によって向上したと自覚されている能力を示している。多い順にコミュニケーション力、スピーキング力、リスニング力が挙げられている。これらの言語能力は、実生活で必要であり頻繁に使われた結果向上した能力である。
4. 質問1に対して質問2と3の回答結果には大きなギャップが見られる。特に、質問1の日本の英語教育によって獲得される能力と質問2の国際的な場面で必要となる能力とに差があるのは大きな問題である。次の表は、質問1～3の回答結果から意味する英語力を上位4位までの比較を表している。獲得される能力の中で、英語力1において3位に示された「その他」の内容には「特になし」と「不得意」が75%含まれているので厳密には能力が獲得されている意識が回答者にはないということである。

表2. 日本の英語教育で獲得される能力と国際場面で求められる能力の比較

英語力 回答の上位	1.日本で獲得される能力	2.海外で必要な能力	3.海外生活で向上する能力
1位	コミュニケーション力	リスニング力	コミュニケーション力
2位	リーディング力	スピーキング力	リスニング力
3位	その他	語彙力	スピーキング力
4位	文法	コミュニケーション力	ライティング力, 語彙力

上記表2. から読み取れる点をいくつか指摘したい。まず、日本の学校での英語教育では、意思の疎通を図る能力と書物から情報を得る能力、あるいは英語力に対する不得意意識が獲得される。しかし、実際、海外で必要と感じられる能力は、目の前の相手が言うことを聞き取ることができ、自分の言いたいことを言える能力、つまり、確実に受信し発信する能力であることがわかる。英語力の3.は、現地の生活で必要不可欠なために向上する能力であると考えられるが、現実には目の前に相手が存在して使われる英語力である。明らかに、国内での学習内容と国際場面での学習者のニーズにはギャップが見られ、ニーズを満たす英語力を獲得させるには日本の英語教育の重点を英語力2.と3.で表れた技能へ移行することが示唆されている。この点に関して、鈴木(1999:70)は、「これからの外国語教育が自分の意見や考えを外に向かって外国語で言える人を養成する外向きで積極的な発信型へと重点を移す必要がある」と同様の方向性を主張している。

5. 質問4. の「回答者にとって効果的だったレッスン内容」に関しては、ここで挙げられたレッスンは、同時に日本の学校教育で不足していた、あるいは受けられなかったために補う必要のあった、そして海外生活で役に立ったトレーニングを意味すると思われる。a)~d)の分類で、リスニング力、コミュニケーション力、スピーキング力、語彙力に重点が置かれているトレーニングが主として挙げられていることがわかる。またこれは、上記4. の表2. で表された能力と共通しており、いかに日本の英語教育が言語使用の実践面で不十分であるかということが示されている。

内容的にみると、a)はリスニングの訓練であるが、マス・メディアからの情報受信や発話を意識したものなど、積極的な受信トレーニングが多く含まれていた。b)の会話トレーニングは、少人数での英語母語話者との交流による、集中的な訓練であった。c)は、日常会話のような簡単な内容を超えて、さらに詳しいまとまった内容を説明したり、論じたりすることを含む積極的な発信トレーニングだと受け取れる。d)では、自分で使用することになるであろう語彙と文法等の知識を得る目的の勉強が含まれていた。従って、効果的なレッスンのおおよその傾向として、各人の予想した現地の活動の場で必要な能力の訓練や、確実な相手のメッセージの受信と自らの発信を意識した訓練が考えられていることがうかがえる。

6. 質問5. の「日本の英語教育の方向性」についての意見は、上記3. E.3.で示されているように、内容的に見て、4つの点からまとめることができたが、英語教育の問題としてどれも議論の余地のあるものであった。a)~d)の各項目について観察できることを述べる。

a) 重視すべき英語力

リスニング力・スピーキング力・コミュニケーションの手段と認識した上での英語力を重視すべきだという考えを持つ者が回答者の約3分の1を占めた。上記で見てきたように、この点は質問1～4までの回答結果と一致した考え方である。文法を扱う機会については、異なる意見が出された。低年齢時から基本として発音とリスニング力を身につけておけば、本当に必要になったときに取りかかりやすいし、文法や語彙は後からでも身につけられるという意見、文法の授業より会話訓練をすることによって、必要な文法力と語彙力は身につくのだという意見、あるいは、大学で「英語学」として文法を教えればよいという意見があった。一方、会話偏重を恐れ、全ての基本である文法をおろそかにすべきでないという意見もあった。

b) 配慮すべき英語教育環境

環境あるいは制度の充実を主張するさまざまな意見があった。特に、楽しく学べる、英語を使わざるを得ない環境作りの必要性や、英語学習を義務にするのではなく、自由選択にすべきだという意見が多かった。これは、従来の興味・関心・意欲をもてない授業形式や環境についての不満の表れと理解できる。また、英語を受験科目からははずすことで、点数稼ぎを目的とする学習を排除すべきだという意見や社会に出た時に専門分野が英語で深まっているように大学の専門課程で英語の教科書を使用すべきという主張もあり、学習者が本来の学習目的を自覚できる環境を与える必要性が訴えられていた。

c) 異文化理解

英語教育の中で異文化理解教育を促進することの必要性が主張されている。また、白人コンプレックスや白人文化以外の地域の文化に対する偏見をもたせないこと、英語による低文脈な発想法を理解し日本語の高文脈な発想法を使い分けられることが重要であるという文化に関わる具体的な側面も挙げられた。白人コンプレックスに関して言えば、日本は、明治以来の西欧の学問、文化、技術への依存と傾斜の結果、西欧が日本人の憧れの対象となり、日本人にとっての外国は西欧が考えられていたと鈴木(1985:209)は指摘している。従って、日本人の中にある白人文化とその他の異文化に対する偏見に関する回答者の指摘は適当であることがわかる。また、異なる発想法に関して、本名(1993:28)は、文化とコミュニケーションの関係を文脈(コンテクスト)の観点からとらえた「高文脈依存型」と「低文脈依存型」のコミュニケーション・スタイルの理解は、異文化を背景にもつ人間関係の形成を豊かなものにするであろうと述べている。この項目では、世界の諸地域でさまざまな文化背景をもつ人々が自らのコミュニケーション・スタイルで英語を使用している現状から、白人文化に偏ることなく多様な文化を理解しようとする態度を持ち、相手の文化に対応していく能力の養成が求められていることが明らかとなった。英語教育の中で行われる異文化教育の目的について、伊原(1996:312)が述べるように、英語圏文化への同化ではなく、将来遭遇し得るいかなる文化にも対応できる視野と態度を育て英語でそのように行動できる能力を習得させることが回答者からも期待されている。

d) 母語教育

母語教育の重要性について挙げられた根拠は、早期英語教育の導入をする前に重要視すべき問題として、現代の日本人は日本語力が貧しく、その言語能力の強化が急務であるということである。論理的思考能力や母語の大切さという点も挙げられていた。言語教育という観点から、伊原（1990:33）は、言語が思考と表裏一体の関係にあり、文化の一現象であるために、その学習には社会・文化的な問題が関わってくると指摘する。母語、つまり、第一言語習得が外国語学習にも関係していることは見逃せない点である。日本語（母語）教育と英語教育の関連性について、松本（1998:10）は、「異質なものに触れさせる」外国語教育は学習者が日本語や日本文化と向き合い、自己を認識し、再評価する姿勢で学ばせてこそ、お互いの母語や文化を尊重した対等な立場での双方向コミュニケーションが成立すると述べており、疎かにできない視点である。

4. 結論

今回の調査は筆者の身近な者からであり、実際に世界の諸地域での生活経験をもつ者からの率直な回答が得られた。明確な目的意識をもって英語学習に励んだ経験の持ち主でもある彼らから、日本の従来の英語教育の問題点とこれからの英語教育の求められる方向性について生の声として大いに示唆に富んでいたように思える。特に青年海外協力隊の経験者の英語を母語としない地域での生活・勤務を体験に基づいた回答は、「国際語としての英語」を手段に生活した者が多いので、参考にできる点が多いのではないだろうか。

「これからの英語教育の方向性」についての示唆は、とりわけ注目に値する項目がそろったように思える。重視していくべき英語力は明らかに、相手を目の前にして、情報あるいはメッセージを受信し（リスニング力）、自分の意見を発信（スピーキング力）していく言語能力である。しかも国際的な実践の場で通用する受信と発信のバランスのとれた能力が求められている。新指導要領で加えられた「実践的コミュニケーション能力」獲得の必要性は妥当な流れである。また、学習環境についても、もっと実践の場を意識できる環境作り、制度やカリキュラムの転換が学習効果を上げるために必要となってくる。それによって、学習意欲・興味を高め、学習目的を自覚させることが重要である。さらに、偏見のない異文化理解とその知識を生かした言語技能が、これからの国際語として使える英語力と結びついていくであろう。発想、言語力という点では、日本語能力も無視できない。論理的・主体的な思考力を伴う母語力がなければ、外国語学習が効果的に進むとは考えられないのである。

以上のことから考えられることは、今回の調査で期待されている英語力とは、多様な文化の中で英語を手段に対応できるコミュニケーション能力を意味するということである。英語を、国際語として、つまり相手と文化的に対等な受信・発信手段として、使用できる能力の養成が求められている。回答者から示された効果のあがる具体的なトレーニング方法や英語教育の方向性は、海外という実践の場を強く意識した内容であり、現代の国際社会と日本人のニーズに即した英語教育の方法として吟味し参考にしていきたいものである。

参考文献

- 青木 保 2001. 「異文化理解」東京：岩波書店
- 本名 信行 1993. 「文化を超えた伝え合い ―コミュニケーションと言葉―」東京：開成出版
- 堀部 秀雄 1998. 「国際理解教育・異文化理解教育への異論」『現代英語教育』12月号 研究社 pp.22-25
- 伊原 巧 2001. 「外国語教育の類型―考察」『中部地区英語教育学会紀要』第31号 pp.129-134
- ―― 1996. 「英語科教育における国際理解教育の目的、内容、方法」『中部地区英語教育学会紀要』第26号 pp.311-318
- ―― 1990. 「異文化理解をすすめる題材内容のあり方」『信州大学教育学部紀要』71号 pp.33-44.
- 石川 慎一郎 1995. 「異文化理解教育とマス・メディア」『英語教育』2月号 大修館 pp.80-82
- JICA (国際協力事業団) 1995. <http://www.jica.go.jp/activities/jocv/gaiyou/01.html>
- 松本 青也 1998. 「異文化理解の目標と方法」『現代英語教育』12月号 研究社 pp.10-12
- 萬戸 克憲 1998. 「国際理解と英語教育」『現代英語教育』12月号 研究社 pp.6-9
- Samovar, L. A. & R. E. Porter 1995. Communication Between Cultures Belmont:Wadsworth
- 佐野 正之・水落 一朗・鈴木 龍一 1995. 「異文化理解のストラテジー ―50の文化的トピックを視点にして」東京：大修館書店
- Smith, L. 1983. “English as an international language”, In: Readings in English as an International Language, in Smith, L. ed. pp.7-11. Oxford: Pergamon Press.
- 鈴木 孝夫 1999. 「日本人はなぜ英語ができないか」 東京：岩波書店
- ―― 1985. 「武器としての言葉―茶の間の国際情報学」 東京：新潮社

(2002年11月27日 受理)